

研究テーマ

『日本人英語教員の英語力向上に役立つ「教室内英語力」の評価尺度の開発』

1. 尺度開発の背景

英語教育において「いかにして非英語母語話者である英語教師の英語力を向上させるか」は、一つの大きな課題である(Pasternak & Bailey, 2004; Andrews, 2007)。我が国の高等学校新指導要領(2009)においても「英語の授業は英語で行うことを基本とする」と謳われており、その目標(教員はどのような英語での授業を目指すべきなのか)と過程(どのようにして理想的な英語での授業ができるようになるのか)について明らかにすることは、日本の英語教育において喫緊の問題である。

英語力は元来多面的なものであるため(Council of Europe, 2001)、英語教員の実際的な英語力向上のためには、「どのような状況で、何が、どの程度、できなければならないのか」ということを具体的かつ詳細に示す尺度の存在が前提となる(Sesek, 2007)。英語教員の専門的能力の育成には、英語教員集中研修で学んだ内容が自主研修で生かされることが必要であり、そのためには「生徒および状況に応じた教室内英語の使用」及び「教室内英語の自己分析力」の涵養が不可欠である。

本研究は、我々が蓄積してきた研究成果や先行研究の検証を踏まえ、日本の文脈における教室の様々な場面に応じて教師が使用する英語を対象とした内容基準準拠(criterion-referenced)による評価尺度を開発し、英語教師の専門的技能(教室内英語力)における目標とそこに到達する過程に関する指針を提案することを目指したものである。

2. 理論的背景

EFLの教師に求められる教室内英語力

Proficiency is not necessarily equated with nativeness, and certainly not all nativespeakers are equally skilled users of English. There are varying degrees of proficiency: being proficient is a continuum, rather than an either-or proposition. Apparently people can continue to develop their second language proficiency throughout the span of their lives ... Whether or not a teacher is proficient depends on how we define this multifaceted construct. (Pasternak & Bailey, 2004, p. 163)

We can improve our test scores on the standardized tests by the learning strategies for them, because there is a fixed format in this kind of standardized test. The standardized test of this kind often examines the learner's receptive skill. In the real classroom, however, what is required for EFL teachers is rather productive skills such as giving instructions, explaining. For example, we see unclear utterance even in ALT's (assistant language teacher's) speech. (Nakata, 2010, p. 82)

EFLの教師に求められる教室内英語力とは、一般的な英語力と授業力にも下支えされつつも、英語教師として職業上求められる英語力の一部であるという位置づけである。

言語教師の気づきの役割

The language-aware L2 teacher is more likely to be effective in promoting student learning than the teacher who is not language aware. (Andrews, 2007, p. 200)

図1にもあるように、「英語教師に求められる英語力」とは「一般的な英語運用能力」と「教授に関する知識・技能」の交差する部分に位置づけられる。教師に求められる英語力は、図2で示されているように、教授法に関する知識や教師の気づきと切り離すことのできないものである。本研究では、この前提に立ち、特に教室内で英語教師に求められる教師の教室英語力という側面に焦点をあてた尺度開発を行っている。

また、図3にもあるように「教材」「生徒の発話」「教師自身の発話」すべてにおいて、教師は自身の気づきを活用しつつ、これら3つの言語材料を生徒に分かりやすく提示することが求められる。これがないと、生徒の力に依存した英語での授業になってしまい、英語の授業としてはうまくいかない可能性が高い。

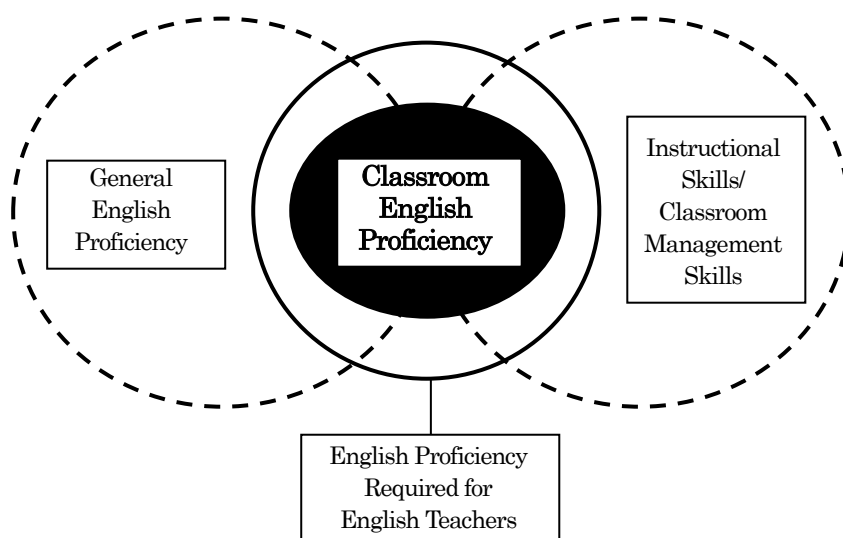


図1. English Proficiency required for Japanese Teachers of English

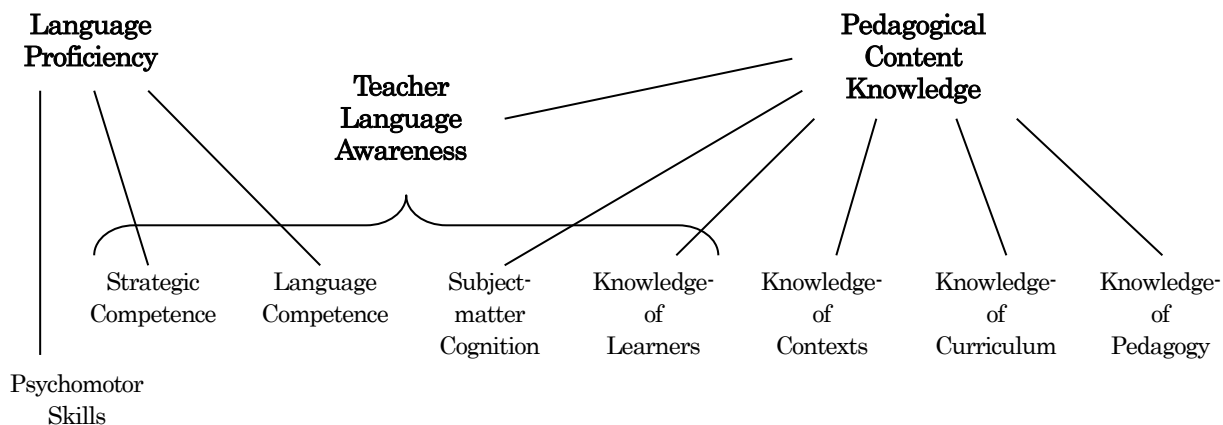


図2. Teacher Language Awareness (Andrews, 2007)

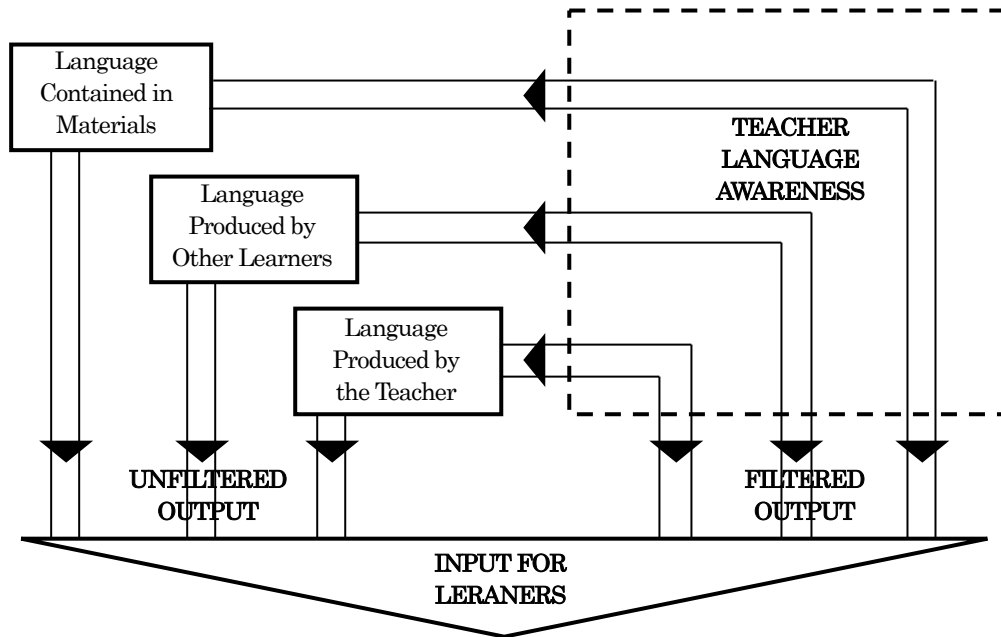


図3. The Role of Teacher Language Awareness in Structuring Input for Learners (Andrews, 2007)

3. 尺度開発の趣旨

- 尺度は **assessment purpose** ではなく **professional development purpose** を持つものである。つまり、評価するという行為は伴うが、究極の目的は **professional development** である。
- 評価自体を第一義的な目的とする尺度ではないので、教育行政機関が **a high stake test** として教員評価の道具として用いることを想定はしていない。
- 評価対象は、英語教師の **English proficiency** というよりも **effective language use in the classroom (effective for promoting language acquisition, comprehension, use)** という方が正確である。
- 不十分な教室内英語力を保持する教員を排除するのではなく、全ての段階にいる教員が時間をかけて自らの教室における教室内英語向上のための研鑽をつむことを奨励する。
- 個人での使用もあり得るが、校内・研究グループ・大学院での **post observation conference**、(教育委員会などが実施する) 教員研修などでの協働での取り組みにおける使用を想定している。つまり、**teacher-initiated professional development** のための道具として資することを目的としている。
- **Teaching techniques** や **subject-matter knowledge** は教師の教室内英語力を支えるものと位置づけるが、それ自体を評価の主眼として扱わない。それらに関する記述は英語教師の英語使用と関係づける形で行う。
- 生徒の授業への参加(**learner engagement in lesson**)の程度は、教室内英語に影響を受けるものであるという考えに立つが、評価の主眼はあくまで教師の使用する英語を対象とする。
- 日本の中高等教育における英語授業(理想とされつつ現実的な授業)を想定しているため、教師主導の講義型授業やPPP(Presentation-Practice-Production)アプローチ関連の活動が**Task-specific Scales**には多く入ることになる。ただし、他の形態の授業を記述対象から除外するという意味ではない。

4. 教室内英語評価尺度の種類とその活用方法

本研究の研究課題を遂行するため、以下の4つの診断尺度の開発に取り組んだ。

統合的診断尺度 (Integrative Diagnostic Scale) ……資料1

総合的に教室内英語力がどのレベルかを判断するための *assessment* を主な目的とした尺度である。文法（正確さと自然さ）、語彙（適切さと多様性）、発音（正確さと自然さ）、指示と説明（効率性と適切さ）、生徒とのインタラクション（スムーズさ）の5つの観点により全体的にどのレベルに該当するか判定する。同時に、評価の理由を補完する目的で、なぜそのような評価にしたかを説明するコメント欄もつけている (*informational feedback*)。

活用方法：表1にもあるように、外部者の観察による評価、ビデオ録画された授業を使った場合の授業者の内省、または、英語科内での研修での検討に適している。

内省的分析尺度 (Reflective Analytic Scales) ……資料2

統合的診断尺度のそれぞれの観点について、日頃の授業を振り返って内省し、自己の能力に関する気づきを高めるための *professional development* を主な目的としたチェックリストに該当する診断ツールである。本尺度は、統合的診断尺度を補完する具体的な記述に基づいた自己評価尺度の側面を持つ。

活用方法：表1にもあるように、授業者が日頃どの程度できているかについて内省することで、授業者の気づきを高めることに適している。

機能別尺度 (Function-specific Scales) ……資料3

内省的分析尺度のうち特に生徒とのインタラクションを中心として、教室内英語使用の言語機能について、さらに詳細な内省を行うための診断ツールである。言語機能としては、誘出(*elicitation*)、促進(*facilitation*)、明確化(*clarification*)、修正(*recast*)、意見(*comment*)、評価(*assessment*)を扱っており、6つの観点から多角的に日頃の授業での取り組みの分析を行う。

活用方法：表1にもあるように授業者が日頃どの程度できているかについて内省することで、授業者の気づきを高めることに適している。

タスク別尺度 (Task-specific Scales) ……資料4・資料5

英語教師が授業中に英語を用いて行う（あるいは行うことが期待されている）一連の活動（＝英語教師にとっての *real world tasks*）を記述の対象としている。基本的に、授業観察に基づき使用する。公開授業などを分析対象とする場合は、授業スタイルや自己目標などに合わせて、授業者がどのタスクを対象とするかを定める。授業実践DVDを分析対象とする場合は、DVD視聴者がどのタスクの尺度を用いるかを定める。

それぞれのタスクにおける言語使用は、「英語の正確さ」「生徒に合わせた言語使用」に加えて「表現力」「コミュニケーションの自然さ」などの複数の観点から評価するようにしている。現在まだ開発中の尺度であり、この報告書では「音読指導」と「ティーム・ティーチングにおけるALTとのやりとり」の2つのタスクの尺度を提示している。

活用方法：表1にもあるように、外部者の観察による評価、ビデオ録画された授業を使った場合の授業者の内省、または、英語科内での研修での検討に適している。

表1. Four Types of Classroom English Proficiency Scales

| | Integrated Diagnostic Scale | Reflective Analytic Scales | Function-Specific Scales | Task-Specific Scales |
|-------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------|-----------------------------|
| Main Objective | External Evaluation & Assessment | Reflection | Reflection | Lesson Analysis |
| High Reliability | Required | Desirable | Desirable | Desirable |
| Users | External Evaluators | Teacher | Teacher | Lesson Observers |
| Unit of Evaluation & Analysis | Entire Lesson | General Ability | Language Function | Task (Selected by Teacher) |
| Based on Lesson Observation? | Yes | No (Possible) | No (Possible) | Yes |

図4にもあるように、4種類の尺度の使用目的は、「内省・リフレクション」（～ができるという程度の判断が妥当か）あるいは「外部評価・観察リフレクション」（～しているという程度の判断が妥当か）のいずれであるか、また、授業の「全体」あるいは「一部」を対象とするかにより、使用者のニーズに従って選択されることが望ましい。

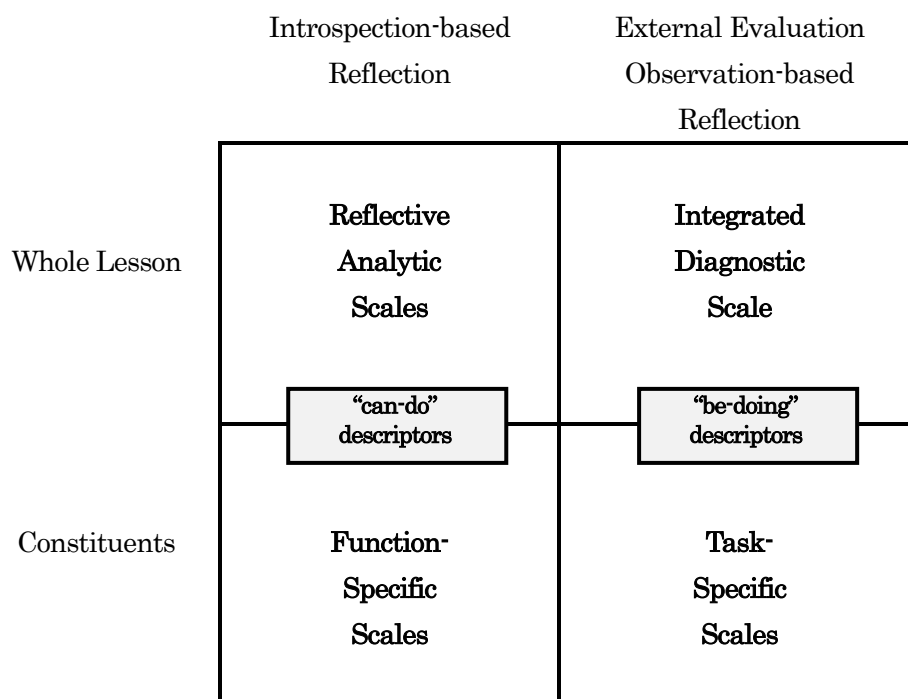


図4. Relationship between the Four Scales

5. 尺度の段階について

本研究において何段階の尺度とするのか、例えば、香港において教員の英語力を査定する道具として使用されている「Classroom Language Assessment(CLA)–Scales and Descriptors」などの既存の尺度も参考にしながら議論を繰り返した結果、professional developmentという側面を重視し、かつ、生徒の理解と言語使用という視点に基づき、表2にある4つの段階に定めることとした。

表 2. Teacher Language Proficiency Scales with Four Levels

| | | |
|---|---------------------------|---|
| 4 | Proficient 熟達 | Showing the possession of an excellent level of teacher language proficiency (様々なレベルの生徒に対して状況に応じた英語を柔軟かつ効果的に使用できる) |
| 3 | Good 優良 | Showing the possession of a high level of teacher language proficiency (多くの生徒に対して状況に応じた英語を適切に使用できる) |
| 2 | Acceptable 適格 | Showing the possession of an acceptable level of teacher language proficiency (間違いもするがその間違いに気づき、修正ができるため、学習者の理解を阻害しない) |
| 1 | Not Yet Acceptable 不十分 | Showing the possession of a not-yet-acceptable level of teacher language proficiency (生徒が理解できない英語であり、間違いに気がつかない) |

6. 英語で授業をするにあたっての提言

最後に、中田(2012)をもとに、教室内英語使用にあたっての提言を以下の通りまとめたい。

- 生徒の顔を見ながら英語の授業をする。
- 英語使用による授業は、生徒と一緒に、少しずつ積み重ねながら、作り上げていく。
- 必要に応じて「意味のある」日本語使用の場面を作る。
- 資格試験での英語力のみにとらわれるのではなく、自らの language awareness を高めることに尽力する。
- 自らの授業をビデオに撮ってみる。
- ビデオを撮り析する上での心理的な負担が大きい場合は、既存のビデオで撮影された英語の授業を見て分析することから始める。
- 授業観察などでも授業者本人の気づきを促進するコメントを心がける。
- 教室内英語尺度使用の協働的取組みは、可能であれば校内研修で、これが難しければ気心の知れた仲間と始める。
- インストラクションの生徒への定着をまず優先させつつ、徐々にインタラクションへと進む。
- 生徒によけいな不安を与えるべきでないように、教員にも不要な不安は与えるべきではない。

参考文献

- Andrews, S. (2007). *Teacher language awareness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Council of Europe (2001). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nakata, Y. (2010). Improving the classroom language proficiency for non-native teachers of English: What and how? *RELC Journal*, 41(1), 76–90.
- 中田賀之(2012). 「学習者のための教室内英語を考える」『英語教育』第61号3巻, 64-66.
- Pasternak, M., & Bailey, K. M. (2004). Preparing nonnative and native English-speaking teachers: Issues of professionalism and proficiency. In L. D. Kamhi-Stein (Ed.), *Learning and teaching from experience: Perspectives on nonnative English-speaking professionals* (pp. 155–175). Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Sesek, U. (2007). English for teachers of English: Toward a holistic description. *English for Specific Purposes*, 26 (4), 411–425.

研究会合

年に3回程度の分担者会議または全体会議を、主に兵庫教育大学大阪サテライトまたは神戸サテライトにおいて開催した。非遠隔のためメール上でのやり取りを含めるとかなりの回数を重ねたことになるため、詳細は割愛することとする。

香港視察調査

平成22年度に香港大学を訪問し、Steve Andrews氏の他、Dr. David Coniam (Chinese University of Hong Kong)や教師教育に携わるK.K. Tong氏、香港評価局など香港の教室内英語のベンチマーク開発にかかわった様々な方々から聞き取り調査を行った。

研究成果発表

- 平成23年1月 中田賀之・長沼君主
『校内研修に役立つ教室内英語評価尺度』
JACET言語教師認知研究会 (共立女子大学)
- 平成23年8月 Nakata, Y., Ikeno, O., Naganuma, N., Kimura, Y., & Andrews, S.
“Developing Assessment Scales of the Classroom Language Use of EFL Teachers”
The 16th World Congress of Applied Linguistics (Beijing University of Foreign Studies, Beijing, China)
- 平成24年8月 長沼君主・中田賀之・池野修
『教室内教師英語評価尺度の開発とその採点者間信頼性の検証』
第38回 全国英語教育学会 愛知研究大会 (愛知学院大学)
- 平成24年8月 Nakata, Y., Ikeno, O., Naganuma, N., Kimura, Y., & Andrews, S.
“Classroom English Language Benchmarks for Japanese EFL Teachers” (特別シンポジウム)
The 51st JACET(大学英語教育学会) Convention (愛知県立大学)

研究プロジェクト・メンバー

| | | |
|-------|---------------|------------------------------|
| 研究代表者 | 中田賀之 | (兵庫教育大学・准教授) |
| 研究分担者 | 池野修 | (愛媛大学・教授) |
| | 木村裕三 | (富山大学・教授) |
| | 長沼君主 | (東京外国語大学・講師) |
| 研究協力者 | Steve Andrews | (University of Hong Kong・教授) |
| | 小笠原良浩 | (兵庫県立姫路西高等学校・教諭) |
| | 河野極 | (愛媛大学付属高等学校・教諭) |
| | 篠原みゆき | (兵庫県立国際高等学校・教諭) |
| | 徳山美穂 | (兵庫県立国際高等学校・教諭) |
| | 棟安都代子 | (兵庫県立加古川東高等学校・教諭) |

* 研究分担者および研究協力者はアルファベット順とする